

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（A）  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18201049  
 研究課題名（和文） 環太平洋地域における日本人の国際移動に関する学際的研究  
 研究課題名（英文） An Interdisciplinary Study of the International Movement of the Japanese in the Pacific Region

## 研究代表者

米山 裕 (YONEYAMA HIROSHI)  
 立命館大学・文学部・教授  
 研究者番号：10240384

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、北米を中心とした「日系移民史」とアジアにおける「移殖民史」の分断状況の打破を試みるため、環太平洋地域を対象として、(1) 各地における日本人社会の形成、(2) 国際移動した日本人と様々な国家との関係、(3) 環太平洋地域システム形成の分析をすることであった。いずれも達成することができた。さらに、地理学情報システム（GIS）を活用した移動研究の新しい方法論を模索することができた。

研究成果の概要（英文）：Three analytical objectives of the project were achieved: (1) Formation of Japanese communities in the Pacific Rim Region; (2) Relationship between local governments and Japanese residents; (3) Contribution of the international movement of the Japanese to the formation of the “Pacific World.” In addition, uses of the geographic information system (GIS) in the study of international migration were explored.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	7,500,000	2,250,000	9,750,000
2007 年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2008 年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2009 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
総計	21,100,000	6,330,000	27,430,000

研究分野：アメリカ研究

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地域間比較研究 アメリカ合衆国 カナダ 朝鮮 中国 日本人移民 日系人 太平洋

## 1. 研究開始当初の背景

北米を中心とした「日系移民史」とアジアにおける「移殖民史」の蓄積を受け継ぎつつ、その分断状況を打破しようと試みるのが共同研究の動機であった。同時に、以下のような学問状況に応答することを想定した。

## (1) グローバルヒストリー

フェルナン＝ブローデルの地中海世界、

バーナード＝ベイリンが近著で試みた大西洋史の記述は、海を渡る長距離移動とそれに伴う諸現象の分析が、一国史的理解の限界を超える可能性を持っていることを示してくれる。中国人、インド人の国際移動については、杉原論文が世界史のアプローチを試みて成功しているが、日本人の記述は不十分である。エヴリン＝ヒュー・デハート、リン＝パ

ンらの海外中国人研究は、中国と東南アジアを結ぶ華僑ネットワークの延長上に南北アメリカの中国人体験を描いた。吉田亮の越境教育論は、グローバルな記述を予感させるが、現状では二国間の越境論である。これらの先行研究に触発され、日本人の国際移動をグローバルな歴史展開として見る試みが本研究であり、日本人については他に例がない。

#### (2) 国際労働力移動研究

サスキア＝サッセンや伊豫谷登士翁等の国際労働力移動研究は、資本の国際移動に呼応した人口の移動を分析することで、ブッシュ・プル要因という説明原理しか持たない移民研究に衝撃を与えた。しかし、19世紀末から20世紀初頭の時代にも存在した諸現象を無視し、現代の特異性を過度に強調している。本研究は、20世紀前半の国際移動との比較を可能にすることによって、国際労働力移動の「現代性」の再検討を迫ることになる。

#### (3) 地域研究

地域研究は、その豊かな可能性にもかかわらず、現状では、研究対象国の一国的枠組み内での学際的研究にとどまっていると言わざるを得ない。本研究は、①国境を超越したより広い地域研究のアーリーナとして環太平洋圏を考へること、②国境を「越境」する現象を研究の中心に据えること、によって、地域研究の地平線を拡大できる。我々にとって海外生活を送ることが珍しいことではないように、明治から昭和にかけての日本人にとっても、人生における選択肢の1つに過ぎなかった。第二次世界大戦によって分断され、歴史に押し込められた日本人の海外体験と現在の留学、海外就業体験を、トランスナショナルな地域研究は統一的な視点から分析することを可能にするだろう。

#### (4) カルチュラル・スタディーズ

マシュー＝ジェイコブソンの「想像のディアスポラ」やロナルド＝シーガルのグローバルなアフリカ人世界は、多言語・多文化主義、ディアスポラといった概念を発展させ、国民国家の神話を解体する試みの一環として、我々にも多大な刺激を与えてきた。我々は、日本人の海外移動に関する実証的な個別研究成果を蓄積・統合することによって、カルチュラル・スタディーズの議論に応答したい。

## 2. 研究の目的

本研究の主要な目的は、「日本人が環太平洋地域において移動しつつ、いかに各地で日本人社会を形成し、現地社会と交渉しつつ社会経済的地位を確保し、自分たちの文化を維持・再編成・再生産していったのか」である。本研究の対象時期は、19世紀末から20世紀前半にかけてであり、対象地域は、太平洋の周辺地域（日本、韓国、中国、東南アジア、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、

メキシコ、南米）および島嶼（ハワイ、旧南洋群島）である。上記の目的を達成するために次の3点を追求することとした。

(1) 対象地域に移住し、さらに対象地域間・対象地域内を移動する日本人の実態、および各地における社会形成のあり方を明らかにすること。

全員が日本人の広域移動の原因・実態あるいは各地日本人コミュニティの形成過程を明らかにするための実証的研究に従事する。海外在住日本人の高い移動性を前提に、今まで重視されなかった課題（二世の在日本教育と帰米・帰加二世、米軍所属二世の在アジア任務、米墨国境沿いの農業コミュニティ、民間会社の経営する在朝鮮日本人農業コミュニティ等）の分析を進める。

(2) 国際移動した日本人と様々な国家との関係を明らかにすること。

越境日本人と国家の関係については、歴史学が近代国民国家を主要な問題にしてきたことから、歴史分野の米山、ハヤシ（アメリカ史）、坂口（日本史）、東（アジア系アメリカ人史）が中心となって作業を進める。国家の存在の希薄な地域への日本人の移動が主要なテーマとなる。

(3) 太平洋をめぐる諸地域が、地域システムとして統合される過程を明らかにすること

西洋史において試みられている大西洋システム研究は、広域の移動（人・商品・資本）を大きなテーマとして設定し、各国史の統合とは異なる新しい問題設定を可能にした。環太平洋地域については、可能性が議論され始めたばかりであるが、本研究にとっては中心となる課題のため、「大西洋史」研究を参考に作業を進める。

## 3. 研究の方法

(3) 環太平洋地域システム形成の分析への寄与



(2) 様々な地域における国民国家・政策・社会制度の研究

- ①日本の植民統治政策の分析
- ②日本の移住・拓殖政策および理念の研究
- ③国家の存在が希薄なフロンティア地域の分析
- ④受容国の移民政策・社会経済・文化の分析



(1) 各地における日本人の活動の個別研究

- ①植民者の社会形成・経済活動の分析
- ②超国家的な国際移動の分析
- ③国内・国家の枠内における海外移動の分析
- ④定着的コミュニティ形成の再検討

本研究は(1) 生活世界・コミュニティ、(2) 国家・地域、(3) 環太平洋地域システムの3レベルについて、各メンバーが個別実証研究と全体像提示・理論構築への貢献を果たすものである。主要な作業を図式化すると上記(前ページ)のようになる。

本研究グループは、2006年度からの科研費受給に先立ち、2004年度から立命館大学の学内資金によって予備的な共同研究を開始した。その成果を持ち寄って国際言語文化研究所の連続講座(シンポジウム)「国民国家と多文化主義」第15シリーズ「日本人の海外進出とディアスポラ」(2004年11~12月)を担当した。報告は加筆修正の上論文として『立命館言語文化研究』17巻1号(2005年8月)の特集として出版した。

2006年度は、毎月の研究会で議論をしつつ、上記をベースに論文を加除し、掲載論文はすべて書き直して、米山裕・河原典史編著『日系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の近現代史』(人文書院、2007年3月)を出版した。

2006、2007、2008年度においては、各人が研究目的(1)の生活世界・コミュニティレベルの実証研究を進めるため、海外の資料収集、フィールドワーク等を実施した。その成果については、毎月の研究会で共有し、個別研究の深化と発見の一般化を図った。このような個別研究の進捗報告については、各年度末に『立命館言語文化研究』において公開した。「プロジェクトA3 日本人の国際移動研究会 2006年度研究経過報告」18巻4号(2007年3月)、「プロジェクトA3 日本人の国際移動研究会 2007年度研究経過報告」19巻4号(2008年3月)、「プロジェクトA3 日本人の国際移動研究会 2008年度研究経過報告」20巻4号(2009年3月)。

プロジェクトの中間段階で成果を公表し、研究目的(3)と関わって太平洋島嶼地域を専門とする外部研究者との研究交流を進めるため、国際言語文化研究所の連続講座(シンポジウム)「国民国家と多文化主義」第18シリーズ「環太平洋における移動と労働」(2007年3~7月)を担当した。その報告は論文としてまとめ、『立命館言語文化研究』19巻1号(2008年9月)に特集として出版した。

最終年度の2009年度には、共同研究を通じて析出されてきた、人の国際移動に関わる「国家」の重要性((2)の課題)と、特に「強制移動」の問題を追及するために、7月18日に国際研究集会「日系人の強制移住」を開催し、国際研究協力者永田由利子と環太平洋を見据えた研究のあり方について議論した。また、日本帝国と移民の関係について、8月11日に国際シンポジウム「紀元2600年奉祝行事と在外“日本人”：トランスナショナルな

行動をとる人々の存在を国家はどのように統合し、排除していくのか」を開催した。

さらに、最終的な成果報告として、2009年10月10~11日に国際シンポジウム「環太平洋地域における日本人の国際移動」を開催した(次項に詳述)。シンポジウムにおける報告論文は、『立命館言語文化研究』21巻4号(2010年3月)にシンポジウム特集として出版した。

#### 4. 研究成果

本研究は、環太平洋地域の各地において、各地日本人コミュニティの形成過程を明らかにしつつ、国家との関係、広域の移動との関係等について考察を進めることを目標にしていた。4年間の共同研究の結果、その3点の目標をそれを包含しつつ、さらに、「日本人の移動から環太平洋地域の形成を明らかにすること」もプロジェクトの視野に入ってきた。

成果報告シンポジウム「環太平洋地域における日本人の国際移動」では、4つのセッションを置いた。目的の(1)に関わっては、セッション4「移住先地域から見た環太平洋日本人世界」で議論した。環太平洋地域における日本人の国際移動を、移住先となった地域の視点から考えるものである。近年のトランスナショナリズム研究の展開によって、移住現象は、移住先のみならず送り出し地域を含む複数地域を結ぶ包括的な現象として再定義されるようになり、移民研究の方法論は大きく変わってきた。しかし、移住先での適応過程という移民研究の伝統的な問題関心が不要になったのではない。むしろ、国境を越えた環太平洋という観点から、地域ごとの適応状況の共通点や相違点を議論することがますます求められるようになってきている。すなわち、国境を越えて広がる日本人の世界が、移住先となった地域における環境、人口構成、政治的地位、社会経済的状况、地政学的な位置などとどのように交差したのかという問いは、これまで以上に重要なものとなっている。このような共通理解から、このセッションでは、満州、上海、ハワイ、ロサンゼルスとそれぞれ異なった地域の日本人移民を対象として、それぞれの地域における適応のかたちを比較した。そして、日本人移住者が、環太平洋規模に広がる日本人の世界をいかに各地域の文脈から解釈したのかを考えることで、施政者や思想家が描いた日本帝国のイメージだけでなく、各地域レベルにおける「環太平洋日本人世界」のリアリティについて検討した。

研究目的の(2)および(3)に関わっては、セッション1(基調報告「日本人の国際移動と太平洋世界の形成」)およびセッション2「太平洋世界の多様性・多元性と日本人の国

際移動」を設け、日本人の移動が環太平洋地域における資本主義経済の浸透と同期していることの歴史的意義について様々な観点から報告・議論した。「アトランティック・ヒストリー」の議論を土台としつつ、環太平洋をめぐる人的移動から「パシフィック・ヒストリー」を構築する可能性について検討した。アフリカ人奴隷貿易は、環大西洋地域における商業的農業生産の拡大と不可分であった。アフリカ人労働力を(当時としては)グローバルに展開・供給するシステムが成立して初めて南北アメリカ大陸の土地資源の「有効」利用が可能になり、急速な西欧社会の拡大と富の蓄積がなされたと考えられるからである。これは、自明とされてきた西欧社会の「自立的」発展、世界の他地域に対する技術的・思想的・人種的「優位性」の根拠を覆すものであった。太平洋に目を向けると、中国人、日本人、インド人が大西洋のアフリカ人を上回る規模で移動しており、19世紀以降の環太平洋地域の再編成を考える際には、人的移動を無視して進めることは出来ないことが明らかであろう。太平洋地域についての包括的研究はまだ未開拓の分野である。セッション1の基調報告では、このようなアジア人の移動と太平洋の形成というテーマの一環として、日本人の国際移動の意義を考えることが、最終的に環太平洋地域の歴史的形成についての議論を構築するための第一歩として重要なものであると提起した。セッション2では基調報告の提起を踏まえ、環太平洋世界を理解する試みを、理論、組織、物流、思想という4つのアプローチから、近代における日本人の国際移動・在外体験を検証しながらおこなった。

さらに、セッション3では、地理学のGIS(地理学情報システム)の方法論が移動研究に有効であることを示すため、「GISを活用した東洋拓殖移民への空間論的接近」という題で歴史史料とGISの接点を示した。このような歴史地理学・GIS研究からの空間論的接近は、文字資料に依拠してきた移民史研究に、看過されてきた史実を発見する契機を与えると同時に、トランスナショナルな移動を実証的に分析する方法論をもたらすと考えられる。

このように、本研究は、その出発点で予想できた研究成果よりもはるかに発展し、移民研究の枠を越えた「移動研究」の姿が明確になりつつあると言える状態にまで達した。(これらの最終成果については、次項①～⑬の諸論文として公表した。)

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計30件)

- ① 米山裕「日本人の国際移動と太平洋世界の形成：『大西洋史』の成果を踏まえて」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):5-11
- ② 清水さゆり「パシフィック・ヒストリーに向けて：アメリカにおける研究動向を中心に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):13-26
- ③ 河原典史「太平洋をめぐるニンシと日本人：第二次大戦以前におけるカナダ西岸の日本人と塩ニンシ製造業」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):27-38
- ④ 小川真和子「ハワイにおける日本人の水産業開拓史：1900年から1920年代までを中心に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):39-52
- ⑤ 坂口満宏「誰が移民を送り出したのか：環太平洋における日本人の国際移動・概観」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):53-66
- ⑥ 酒井一臣「『文明国標準』の南洋観：大正時代における一教授の認識」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):67-76
- ⑦ 飯塚隆藤「GISからみた東洋拓殖移民の地域的展開：高知県仁淀川流域を事例に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):77-95
- ⑧ 轟博志「東洋拓殖による農業入植地の立地特性：メソスケールの要因を中心に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):97-107
- ⑨ 佐藤量「東洋拓殖移民の帰国をめぐる同窓会の役割：禾湖里尋常高等小学校同窓会を事例に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):109-120
- ⑩ 藤田拓之「『国際都市』上海における日本人居留民の位置：租界行政との関係を中心に」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):121-134
- ⑪ 山崎有恒「植民地空間満州における日本人と他民族：競馬場の存在を素材として」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):135-147
- ⑫ 朴美貞「植民地朝鮮の博覧会事業と京城の空間形成」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):149-162
- ⑬ 物部ひろみ「戦間期ハワイにおける多民族性と日系人の『位置』：先住ハワイ人との人種関係における一考察」『立命館言語文化研究』査読無、21巻4号(2010年):163-173
- ⑭ 南川文里「多人種都市ロサンゼルスと環太平洋の想像力：リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験から」『立命館言語文

- 化研究』査読無、21 巻 4 号 (2010 年): 175-184
- ⑮ Jin, Michael “A Transnational Generation: Japanese Americans in the Pacific before World War II.” 『立命館言語文化研究』査読無、21 巻 4 号 (2010 年): 185-196
- ⑯ 南川文里「リトルトーキョーの再建? : 再定住期におけるコミュニティと人種間協調主義」『アメリカ研究』査読有、43 号 (2009 年): 135-153
- ⑰ 米山裕「太平洋史の可能性: 太平洋の島々と環太平洋地域から日本人の国際移動を考える」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 3-7
- ⑱ 中程昌徳「ハワイ沖繩移民たちの短歌: 太平洋における日本人・日系人の文学」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 43-47
- ⑲ 須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島: ポストコロニアル異人種間恋愛譚」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 49-63
- ⑳ 石川友紀「オセアニアにおける日本人移民の歴史と実態: ニューカレドニア移民を中心に」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 83-92
- ㉑ 永田由利子「語られ始めた日本人抑留体験: オーストラリアとニューカレドニアを比較して」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 93-102
- ㉒ 権堂千恵「ハワイ日系人の戦争体験: 収容所抑留者とそのプロセス」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 103-114
- ㉓ 守屋友江「戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 115-128
- ㉔ 宮内久光「南洋群島における沖繩県出身男性移住者の移動経歴」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 129-151
- ㉕ 物部ひろみ「戦間期ハワイにおける日系二世女子教育: 日本語学校から料理講習会まで」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 187-199
- ㉖ 橋村修「ハワイにおける魚食文化の展開と日系漁業関係者の動き」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 201-214
- ㉗ 和泉真澄「百年後から見たバンクーバー暴動: 暴動関連日本語史料の整理と分析を中心に」『立命館言語文化研究』査読無、20 巻 1 号 (2008 年): 215-235
- ㉘ 和泉真澄 “The Japanese Canadian Movement: Migration and Activism before and after World War II.” *Amerasia Journal*, 査読有、33 巻 2 号 (2007 年): 49-66
- ㉙ 米山裕「アメリカ史記述の越境化と日本人の国際移動: 移民史の枠組みの解体と再構築に向けて」『立命館文学』査読無、597 号 (2007 年): 144-153
- ㉚ 物部ひろみ「戦間期におけるハワイ日系市民の政治思想とその活動: 米化と民族発展の交差点」『同志社アメリカ研究』査読有、42 号 (2006 年): 113-130
- [学会発表] (計 16 件)
- ① 藤田拓之「帝国と居留民: 上海共同租界行政をめぐるイギリスと日本の対立と妥協」近代社会史研究会 第 228 回例会 (2009 年 12 月 12 日、京都大学)
- ② 南川文里「シヴィック・ネーションの拡張性を見透かす: 1920 年代の日系移民における『排除/包摂』の経験」日本アメリカ史学会 第 6 回年次大会 (2009 年 9 月 20 日、名古屋大学)
- ③ 東栄一郎「紀元 2600 年奉祝海外同胞東京大会」国際シンポジウム「紀元 2600 年奉祝行事と在外“日本人”」(2009 年 8 月 11 日、キャンパスプラザ京都)
- ④ 藤岡由佳「サンフランシスコの一世と米国政府の日系人政策」国際シンポジウム「紀元 2600 年奉祝行事と在外“日本人”」(2009 年 8 月 11 日、キャンパスプラザ京都)
- ⑤ 清水さゆり「紀元 2600 年奉祝スポーツ大会と日系アメリカ人の身体動員」国際シンポジウム「紀元 2600 年奉祝行事と在外“日本人”」(2009 年 8 月 11 日、キャンパスプラザ京都)
- ⑥ 永田由利子「途絶えたオセアニア・南洋地域の戦前日系社会: 強制収容・強制送還までのプロセスをオーストラリアを例に再考察」国際研究集会「日系人の強制移住」(2009 年 7 月 18 日、京都私学会館)
- ⑦ 南川文里「エスニシティに編み込まれる『歴史』: アメリカ日系人における『世代』の言葉」関東社会学会 第 57 回大会 (2009 年 6 月 21 日、お茶の水女子大学)
- ⑧ 南川文里「アメリカ合衆国における日系エスニシティの類型化とその条件」日本社会学会 第 81 回大会 (2008 年 11 月 24 日、東北大学)
- ⑨ 米山裕「ロサンゼルス日本人移民社会と交通: 移民コミュニティ形成・維持の基盤として交通を考える」日本アメリカ史学会 第 5 回(通算 33 回)年次大会 (2008 年 9 月 21 日、東洋学園大学本郷キャンパス)
- ⑩ 佐藤量「グローバル化における反転した植民地体験: 植民地出身中国人同窓会の分析」日本社会学会 第 81 回大会 (2008 年 11 月 23 日、東北大学)

- ⑪ 河原典史『BC州サケ缶詰工場地図集成』にみる 20 世紀初頭のサケ缶詰産業と日本人：火災保険地図の予察から」歴史地理学会 第 51 回大会(2008 年 5 月 18 日、宮城大学大和キャンパス)
- ⑫ 河原典史「Fire Insurance Map (火災保険地図) の歴史地理学的活用：20 世紀初頭のカナダにおけるサケ缶詰産業へのアプローチ」地域漁業学会 第 49 回大会(2007 年 10 月 27 日、宮崎公立大学)
- ⑬ 米山裕「1920 年代におけるロサンゼルス日本人社会と羅府日本人会」関西アメリカ史研究会 第 45 回年次大会(2007 年 11 月 11 日、キャンパスプラザ京都)
- ⑭ 和泉真澄 “Re-interpreting Japanese Canadian Community Movement from Transcontinental and Transpacific Perspectives.” International American Studies Association (2007 年 9 月 22 日、リスボン大学)
- ⑮ 和泉真澄 “Views from the Other Side: Japanese Community’s Reactions to the Vancouver Riot.” Conference, “The 1907 Race Riots & Beyond: A Century of TransPacific Canada,” (2007 年 9 月 7 日、サイモン・フレーザー大学)
- ⑯ 南川文里 “Trans/national Formation of ‘Japanese America’: Past, Present, and Beyond.” 日本アメリカ学会 第 41 回年次大会(2007 年 6 月 10 日、立教大学)

[図書] (計 3 件)

- ① 和泉真澄『日系アメリカ人強制収容と緊急拘禁法：人種・治安・自由をめぐる記憶と葛藤』(明石書店、2009 年) 336 頁
- ② 南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学：エスニシティ、人種、ナショナリズム』(彩流社、2007 年) 291 頁
- ③ 米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の近現代史』(人文書院、2007 年) 282 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

米山 裕 (YONEYAMA HIROSHI)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：10240384

### (2) 研究分担者

坂口 満宏 (SAKAGUCHI MITSUHIRO)  
京都女子大学・文学部・教授  
研究者番号：30298682  
山崎 有恒 (YAMAZAKI YUKO)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：00262056  
河原 典史 (KAWAHARA NORIFUMI)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：60278489

和泉 真澄 (IZUMI MASUMI)

同志社大学・言語文化教育研究センター・准教授

研究者番号：00329955

南川 文里 (MINAMIKAWA FUMINORI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60398427

轟 博志 (TODOROKI HIROSHI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：80435172

ハヤシ ブライアン・マサル (HAYASHI BRIAN MASARU)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：1430189227

(H18→H19)

物部 ひろみ (MONOBE HIROMI)

同志社大学・言語文化教育研究センター・専任講師

研究者番号：10434680

### (3) 連携研究者

宮下 敬志 (MIYASHITA TAKASHI)

立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー

研究者番号：50509346

(H20→H21)

### (4) 研究協力者

東 栄一郎 (AZUMA EIICHIRO)

ペンシルベニア大学(米)・歴史学部・准教授

清水 さゆり (GUTHRIE-SHIMIZU SAYURI)

ミシガン州立大学(米)・歴史学部・准教授

(H19→H22)

ニイヤ ブライアン (NIIYA BRIAN)

日本文化センター(米ハワイ)・資料部主任

(H18)